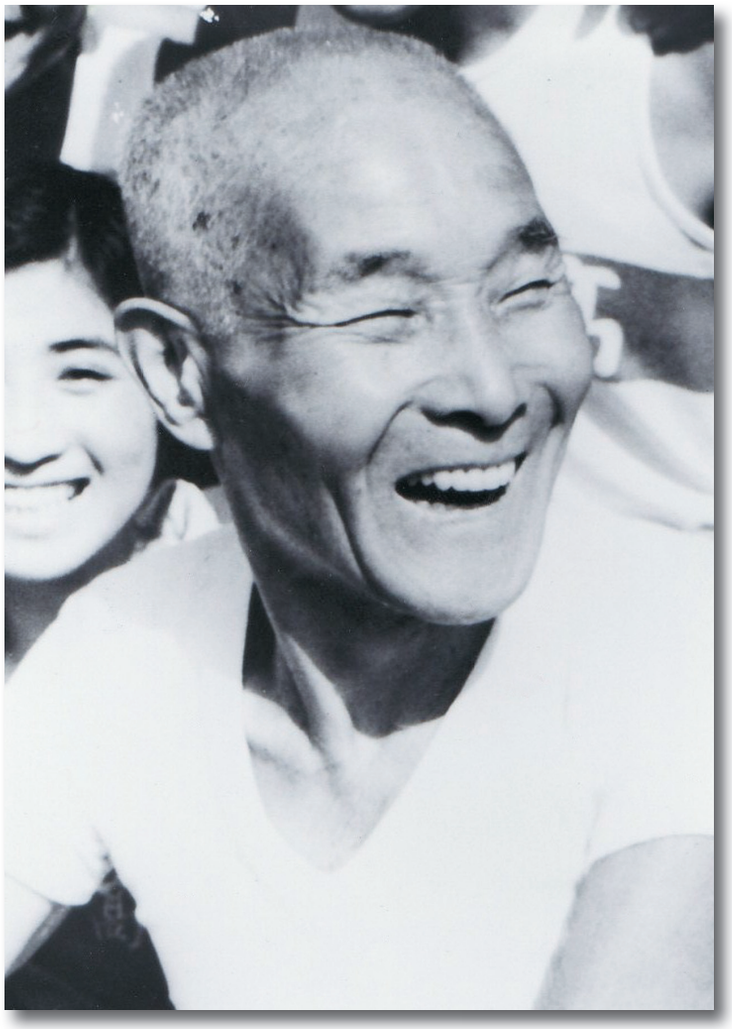
ふるさと玉名市の今



「日本マラソンの父」

金栗四三

── 玉名が生んだ日本人初のオリンピック選手

マラソンシューズの原点「金栗足袋」

これは、金栗四三本人が実際に使用していた「金栗足袋」と呼ばれるものです。当時は運動靴というものはなく、地下足袋のような履物で走ったそうです。オリンピック出場後、東京の足袋屋ハリマヤ黒坂親子に頼んで足袋の改良に取組み、ハゼ（留め金具）をやめ、甲にヒモが付いた形に変わっていきました。これは戦後まで多くの選手が使用する事となり、マラソンシューズの原点ともいえます。　（玉名市立歴史博物館こころピア所蔵）

玉名が生んだ金栗四三（かなくりしぞう）、その軌跡

2012年8月12日、ロンドンオリンピックが無事17日間の日程を終えて閉幕しました。2012年は、日本がオリンピックに初めて参加した1912（明治45）年のスウェーデン・ストックホルム大会からちょうど100年目になります。このストックホルム大会に日本人として初めて参加した2人の選手がいました。その一人がマラソンに出場した玉名市出身の金栗四三氏です。金栗氏は惜しくも完走を果たすことができず、「消えたオリンピック選手」として今でもスウェーデンで語られています。2012（平成24）年7月、この100周年を記念して、ストックホルムで金栗氏の顕彰銘板の除幕式と、金栗氏のひ孫にあたる蔵土義明氏を招待しての100周年記念マラソン大会も開催されました。金栗氏は、その後、「日本マラソンの父」として称えられ、日本スポーツ界に大きな影響を与え、すばらしい功績を残されました。玉名市では、いまでもこの偉大な先輩に敬意を払い、金栗を冠したさまざまな大会を行っています。今回「ふるさと玉名市の今 Vol.5」を発刊するにあたり、玉名の偉人「金栗四三」にスポットをあてて紹介します。

玉名市長 高芳哲哉

→若かりし頃の金栗四三の姿。旧制玉名中学時代は、特待生に推されるほどの秀才でした。

マラソン金栗誕生

金栗四三は、1891（明治24）年、玉名郡春富村（現和水町）の造り酒屋に誕生。後22歳で玉名郡小田村（現玉名市）池部家の養子となります。

10歳で玉名北高等小学校（現南関町）に入学。往復12キロメートルの道のりを毎日走って通学したそうです。その後、旧制玉名中学校（現玉名高校）を優秀な成績で卒業。東京高等師範学校（現筑波大学）に進学して徒歩部に入り、才能を見いだされます。そして1911（明治44）年に開催されたオリンピック国内予選会で見事優勝。オリンピックでのメダル獲得が期待されました。

オリンピック出場、消えたオリンピック走者

1912(明治45)年7月14日午後1時48分、マラソン競走が始まりました。コースはカーブや上り下りが多い難しいコースなうえ、気温は30度を超える猛暑。選手にとっては大変厳しい条件でした。そんな中、スタートこそ出遅れるも17位まで順位を上げる金栗。しかし、折り返し地点を過ぎてまもなく、急激な疲労が彼を襲います。懸命に力をふりしぼって走り続けようとしますが、体がいうことをききません。頭の中がボーッとしてかすみはじめ、とうとう26.7キロメートル地点でコースをはずれ、林の中に消えてしまいました。このことで金栗は、ストックホルムでは「消えたオリンピック走者」として語られることとなりました。(この時、コースをはずれた金栗は、スウェーデン人農家のペトレ家に保護·介抱されていました)

オリンピック出場後、日本スポーツ（駅伝）のさきがけとして

金栗はストックホルム·マラソン翌日の日記にこう記しました。

「大敗後の朝を迎う。終生の遺憾のことで心うずく。余の一生の最も重大なる記念すべき日なりしに。しかれども失敗は成功の基にして、また他日その恥をすすぐの時あるべく、雨降って地固まるの日を待つのみ。人笑わば笑え。これ日本人の体力の不足を示し、技の未熟を示すものなり。この重任を全うすることあたわざりしは、死してなお足らざれども、死は易く、生は難く、その恥をすすぐために、粉骨砕身してマラソンの技を磨き、もって皇国の威をあげん」

オリンピック出場で見た世界のスポーツ競技水準に、金栗は日本でもスポーツを広めなければならないと決意します。女子体育の振興をはじめ、箱根駅伝など駅伝大会を企画。また故郷に帰ってからは、熊本県体育協会をつくり、初代会長として県体育界をリードしました。

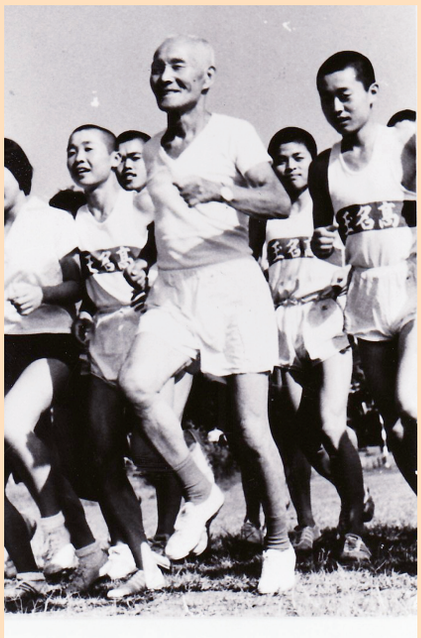
ストックホルムからの招待、55年目のゴール

ストックホルムオリンピックから55年後の1967(昭和42)年、金栗のもとにストックホルムオリンピック委員会から一通の手紙が届きました。それはオリンピック55周年記念行事の一環として招待したいという内容でした。

同年3月20日、金栗は55年ぶりにストックホルムの空港に降り立ちました。オリンピック委員会は、金栗が行方不明となって果たせなかったオリンピックのゴールインを、祝賀行事で行うことを計画。スタジアムに正式のゴールテープを用意していました。75歳の金栗は、両手をあげてゴールテープを切りました。そのとき会場に「日本の金栗四三選手、ただいまゴールインしました。タイム54年と8カ月6日5時間32分20秒3、これをもちまして、第5回ストックホルムオリンピック大会の全種目を終了いたします」とアナウンスが流れ、会場は大きな拍手に包まれました。金栗は、「長い道のりでした。その間に嫁をめとり、子供6人と孫10人ができました」と語りました。この記録は、世界で最も遅いマラソン記録として語られています。

大きな功績を残した人生

金栗は、期待を背負って出場したオリンピックで結果を残せませんでした。しかし、国際大会への参加から得た教訓を生かし、その後の人生をマラソン界の発展と日本スポーツの基礎を築くことに奔走しました。「体力·気力·努力」の精神のもと、誰もがスポーツを楽しむ日本をつくることに生涯をかけ、金栗四三は1983(昭和58)年、92歳で永眠しました。



玉名に今も残る"金栗"の名前

金栗四三といえば「日本人初の五輪選手」「箱根駅伝の発案者」「日本マラソンの父」などの逸話が全国的に有名ですが、玉名でも“金栗”の名前は今も残り続けています。

金栗駅伝大会

金栗四三の功績をたたえ、玉名市陸上競技協会が毎年開催。30回以上の歴史を持つ大会で、小学生から一般までが各部門で争います。

金栗杯玉名ハーフマラソン大会

昭和24年に開催以来60余年の歴史と伝統を誇る大会。若手選手の登竜門として数々の名ランナーを輩出してきました。

金栗四三の銅像

金栗四三の出身校である熊本県立玉名高校の校庭には、彼の銅像があります。昭和44年に建立されて以来「白亜の殿堂」に向かい生徒達をずっと見守っています。

発　行　日／平成25年2月特別号　E-mail／hisho@city.tamana.lg.jp　URL／http://www.city.tamana.lg.jp
編集・発行／〒865-8501　熊本県玉名市繁根木163番地　玉名市役所秘書課　☎0968-75-1405　FAX0968-75-1166

世代を超えてひ孫が感謝
曽祖父と同じコースを疾走！

平成24年7月14日、ストックホルムでは100年前と同じコースを走る五輪100年記念マラソン大会と、金栗四三の功績をたたえた顕彰銘板の除幕式が開催されました。この式典に、金栗四三のひ孫にあたる蔵土義明さん(25)＝熊本市＝と髙嵜市長の2人がスウェーデンから招待。蔵土さんはマラソンに参加し、髙嵜市長は除幕式に参加しました。この夢のような話は、日本とスウェーデンの間で、多くの人たちの尽力によって実現しました。

▷顕彰銘板の前で、ペトレ家と一緒に撮影

100年記念マラソン

7月14日午後1時48分、ストックホルムにあるオリンピックスタジアムに号砲が鳴り響きました。約1万人の参加者が100年前と同じ時間にスタート。当時とほぼ同じコースを駆けだしました。蔵土さんは曽祖父である金栗四三がつけた番号と同じ822番のゼッケンと日の丸を胸にスタートしました。

一方、同日午後1時30分、100年前に金栗四三が介抱されたペトレ家があったその場所では、顕彰銘板の除幕式が行なわれていました。その場所に設置された銘板は、日本語とスウェーデン語の二つ。除幕された瞬間、大きな歓声が上がりました。

蔵土さんは、午後3時5分、除幕式会場がある往路15キロメートル地点(金栗が倒れたのは折り返し後の復路25キロ地点で同じ場所)に到着。そこでは金栗四三を介抱した家族のひ孫、タチアナ・ペトレさんが、100年前の衣装に身を包み、蔵土さんをコース沿いのテントに招き入れ当時と同じもてなしをしました。「おいしかったです。ありがとうございます」と蔵土さんは勢いよく残りのコースを走り出しました。

高低差40メートルと起伏のあるコースに、蔵土さんは30キロメートル地点くらいから足がつりそうになり、走ったり歩いたりを繰り返し。しかし「誰でもフルマラソンは走れる、少しずつ距離を伸ばしていけばいい」と自分に言い聞かせ、スタジアムへ到着。大歓声の中、4時間25分1秒でゴールしました。

大会後、蔵土さんは「今、当時ペトレ家へお礼の手紙を書き、事あるごとに手紙を書いた曽祖父の気持ちが、この旅を通してよくわかりました。いつかまた、スウェーデンの地を走りたいです」と感慨深く思いを話しました。

そして今年2月、ペトレ一家が東京を訪れます。タチアナさんの弟ヨハンさんが、東京マラソン2013に参加し、その応援で、タチアナさん、母ジオさん、娘ミカエラさんが応援に駆けつけます。さらに、それを受け、蔵土さんも参加する予定です。金栗四三から始まった交流は、いまだなお、続いています。

▷100年前に金栗が倒れた場所でタチアナさんがおもてなし。壁には若い頃の金栗の姿。

箱根駅伝に賭けた夢
「消えたオリンピック走者」金栗四三がおこした奇跡

佐山 和夫(著者)

この本の著者の佐山氏は、実際に金栗を介抱したペトレ家やマラソンコースなどを訪問し、当時のレースの様子をさまざまな方面から検証しています。参加者のみならず、金栗を介抱したペトレ家の人々、沿道で声援を送っていた人などから聞き出した当時の状況から、金栗本人も知りえなかった多くの新事実が明るみになりました。また、熱射病による「行方不明」が後の金栗の人生、ひいては日本の陸上界にどのような影響を与えているか、それらを踏まえて箱根駅伝や福岡国際マラソンがどのようにして開催されるようになったかについても触れています。金栗四三がつくり上げた「マラソン日本」100年の歴史をたどってみませんか？

(玉名市立歴史博物館こころピア協力)